

3分でわかる『世界開発報告（WDR）2026』

世界銀行が2026年に発表した、AIと途上国の開発についての報告書のポイントを、高校生にもわかる言葉でまとめました。

ポイント1：AIは「歴史上いちばん速く広がった技術」

蒸気機関は、豊かな国から貧しい国に届くまで約80年かかりました。ChatGPTは公開からわずか6か月で、世界の利用の半分を中所得国が占めるようになりました。

ポイント2：でも、「どれだけ深く使えているか」には大きな差がある

2025年4月時点で、ネット利用者のうちChatGPTを使う人は、高所得国では約25%、低所得国ではわずか0.7%でした。「速く広がる」と、「みんなが同じように恵みを受ける」ことは別の話です。

ポイント3：AIが役立つかどうかは「3つのC」で決まる

- ・能力（Capabilities）：診断・予測・助言など、専門家が足りない仕事をAIが手伝える
- ・集中（Concentration）：AIをつくる力（モデル、半導体、データセンター）は、ごく少数の国と企業に集まっている
- ・補完要素（Complements）：電気・ネット・教育・データ・制度といった「土台」がなければ、どんなに賢いAIも力を発揮できない

ポイント4：進む順番は「使う→合わせる→つくる」

報告書は、多くの途上国にとって、最先端のAIを自分で開発するのは当面現実的ではないとしています。その代わりに、次の3つの道を示しています。

1. Adopt（使う）：すでにあるAIをそのまま使う
2. Adapt（合わせる）：地元の言葉・ルール・ニーズ・使える機器に合わせて作り変える（もっとも効果が大きい道）
3. Advance（つくる）：経験を積んだ先で、最先端のAIやインフラを自ら開発する

ポイント5：「小さなAI（Small AI）」が大きな成果を出している

電気やネットが十分でない場所でも動くように作られたAIです。たとえばガーナでは、普通の携帯電話のSMSで数学を教えるAI家庭教師が、約1年分の学習効果をもたらしました。いちばん新しく大きなAIより、その場所に合ったAIが役に立つことがあるのです。

まとめ 放っておけば、AIは世界の格差を広げるおそれがあります。格差を縮められるかどうかは、土台づくりと、AIを現場に合わせる努力しだいです。

出所：World Bank (2026) World Development Report 2026: The Promise of Artificial Intelligence, Overview